

<p>猿島野の大地を考える会便り</p>	<p>猿島野の大地を考える会 事務局 世話人代表 小野 賢二</p>
----------------------	--

猿島野の大地

代表 小野 賢二

会員の皆さん、いつも会に大変なご支援を頂き心から感謝を申し上げます。

さて会の発足から二十九年目を迎えることになり、活動の実績にこの上ない重みを感じております。

そして、本年は新型コロナウイルスの感染が蔓延して全世界に拡大しており、罹患を防ぐために、毎年五月に開催するはずだった会の親睦交流会を中止せざるを得なくなりました。今回まで一度も休まず続けてきたので、とても残念ですが、ご了承ください。

私もこの地で平飼い養鶏を三十五年間営んでいますが、自然環境を整えることで、生物はとても順調に生育してくれるものです。

私達の会は、環境を守るために生き物がどのように営みを続けていくのが良いのか、大地の様子をできるだけ細かに観察し、地球全体のことを考えながら会の活動をしてまいりました。考えて見ますに、今回の新型コロナウイルスも地球温暖化による自然災害の大きな影響を受けて、ウイルスが大発生したものと考えられるように思えてなりません。

このウイルスの感染を防ぐ優れた方法は、密閉、密集、密接の三つの密を守ることが一番大切であるとのこと。私が自然養鶏を始めたのは、なんとこの三つの密を避けるために取り組んだものです。鶏舎は全て平飼いとして、運動場に出す、いわゆる密閉をしないこと。そして、羽数を少なくして広い面積で飼育し密集をさせない。そうすることにより、自由に好きな所に自分の意志で行動し、密接をしないということです。

今日の家畜の飼育はすべて効率を考え、単位面積当たりいかに多くの量を生産するかに重点が置かれ、生物としての扱いを受けることなく経営されています。それによりたくさんの高額な施設を作り、化学薬品や添加物により人為的に健康体を作っているように思われます。このことによりウイルス病原体の拡大と猛威が止まらなくなる悪循環を作り出しているのではないのでしょうか。

これを機に国内の食糧供給や食生活のあり方など、海外からの輸入に頼ることなく、国内で自然循環型の安全な食料を確保できる自給率を高めることもっとも必要であるということを知らされたように思われます。できるだけ国内商品を増やして、国内の農業や製造業を支える力となるような産業構造に転換する時期にきています。多くの方が食の不安を感じている今こそ、その意義をしっかりと見つめなければならないと思います。

私たちの会で取り組んできた地球温暖化問題に対する解決法の一つ、二酸化炭素を吸ってくれる光合成細菌と生ごみの簡便な自家処理法も、大地を微生物で豊かにし、安全な食料の自給につながります。

そして、私たちの会が、支援の主軸を置いてきたアフガニスタンのペシャワール会の中村哲さんも、難民の人達の水と食料の自給こそが彼らの自立につながると奮闘してきましたが、凶弾に倒れられ無念でなりません。中村さんの死を無駄にすることなく、私達の会も微力ながら、争いのない環境を汚さない社会を目指して歩んでいきたいと願っています。今後とも会員の皆様のご協力とご支援の程を切にお願い致します。皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。



会独自の達成感を持って、法人を無事に解散できたことを祝って、親睦会、交流会の様を一瞬でとらえた名写真。

四季の会の活動を通して

石川 鈴代

桜の花が満開の季節となりました。いつもなら桜を追いかけ、日本の美しい春を謳歌しているはずなのに、今年は新型コロナウイルスのため、世界中が恐怖にさらされています。

最近では、地球が壊れてしまうのではないかと心配するほどの異変が、あらゆる形で現れています。

私達、四季の会も環境保護のために紆余曲折しながら、なんとかささやかな活動を続けています。

今一番力を入れて活動していることは、光合成細菌を生ごみの中に入れた土を作り、農作物を栽培していることです。会員各自が自宅の畑や庭で実践しております。

昨年、私は自宅前の畑、約六十坪を全て手作業で始めてみました。荒れ放題の土地だったので、草取りが思ったより大変でした。土を鍬で耕し畝引で畝を作り、そこへ光合成細菌の入った生ごみを播き、土をかけておきます。土が出来上がったら種をまき、苗を植えました。さやいんげん豆、じゃがいも、ねぎ、玉ねぎを沢山収穫することができました。素人でもこんなに美味しい野菜をつくることができることに感激致しました。今年は、もう少し面積を広げて、色々な種類の野菜作りに挑戦したいと思っています。

近所の人々には、野菜作りの方法等を教えて頂いたり、私が光合成細菌と生ごみの肥料作りを伝授したりしながら、交流を深めることができました。長いこと勤めをしており、近所付き合いの少なかった私ですが、農作業を通して仲良くしていただき有り難いことです。

毎週火曜日に活動している四季の会の仲間とは、短時間ですが草取りをしたりどくだみ茶を作ったりしました。その後は、お茶飲みをして楽しい充実した一時を過ごしております。

大地っ子の若いお母さんやよちよち歩きの乳幼児達との触れ合いもまた新鮮な楽しい一時です。未来に向かって明るい希望や喜びを感じる幸せな貴重な瞬間です。

残された人生が段々短くなっていることを自覚しなくてはなりません。健康の許す限り、四季の会の仲間とともに、未来の子供達のために役立てるように頑張っていきたいと願っています。

3 / 1 1 で「富津班」の誕生

藤島 トシ子

桜の便りが届き、日本列島がピンク色に染まる、一年で一番良い季節となりました。

ところが今、新型コロナウイルス パンデミックの脅威が世界中を襲っています。一刻も早い終息を心から祈るばかりです。

会の小野羊子さんと私は、千葉県富津市で生まれ育った同級生です。喜寿を迎えた今も尚「羊子ちゃん」「トシ子ちゃん」と呼び合う幼馴染です。

羊子さんは会の活動を続ける中、四冊もの本を出版しています。発行する毎に心のこもったお手紙を添えて送って下さいました。

2011年3月11日、あの東日本大震災が東北を襲いました。その直後、羊子さんからお便りが届き、そこには「自分の著書も含めて、もったいないピースエコショップの売上の全額を、今回は被災地に送ります」と書かれてありました。

丁度そんな折、千葉から中学校の同窓会開催の通知が届きました。出席を決めた私は、羊子さんに相談せぬまま、当日羊子さんの著書を持参し、同窓会の方達に出来れば本を購入して頂いて、寄付に協力してもらえたらと考えたのです。同窓会の当日、幹事さんの決諾を得て、羊子さんの著書を廻し読みしてもらい、羊子さんが茨城の地で環境問題に身を挺して活動されている事、被災地への深い思いを同窓会の席上でお話しさせて頂きました。故郷を離れて四十数年、小中学校時代の羊子さんしか知らない同級生からは、一瞬驚きの声とともに感動の声が挙がりました。私達の同級生の一人が本を出版！私もそうですが、誇りに思うと云ってくれる方も。賛同してくれる方が続出。そんな時です。同席していた加藤セツ子さん、相原トミ江さんの二人が、本代をその場で集金、届け先の確認など、取り纏めて下さいました。同窓生との絆が強まった一日でした。同窓会幹事さんの配慮、加藤さん、相原さん、羊子さんのお力に心から感謝し、私にとっても忘れ得ぬ大事な日となりました。その後、羊子さんから驚きと感謝の電話があり、思い切ってやってよかったとつくづく思いました。

ところがそれだけではなかったのです。あの後、加藤セツ子さんが、「会」の存在を広めて呉れました。彼女は現在も指導的な立場にあり、そのお人柄から皆さんに愛され、大変信頼されています。彼女の努力で、会員の数も増え「富津班」の誕生と相成りました。交流行事や総会に出席可能の方達、そろっ

てチャーターしたバスにて自生農場へ向かいます。そして有意義な一日を過ごさせて頂いています。

会長さん始め役員の皆様方の活動に心から敬服しております。お世話になっております。改めて御礼申し上げます。



八十才をすぎた会員さんが光合成細菌と生ゴミで育てた元気野菜を届けて下さいました。

お問い合わせ先

NPO 団体	猿島野の大地を考える会事務局 Tel&Fax 0280-88-7670
〒306-0505	茨城県坂東市菅谷 2218 自生農場 年会費 1000 円(以上)
振込加入者名	猿島野の大地を考える会 郵便振込口座 00300-0-35167
ご意見、ご感想などありましたら上記までお知らせください。お待ちしております。	

今こそ大地に根ざす生き方を

石川県宝達志水町 元屋 和則

人もいつかは死ぬのが自然の摂理。生物は生まれては死んで、命のリレーを繋ぎながら進化してきたが、最近の学説では、ウイルスもそれに一役買ってきたとされている。個体間や他生物間を超えた遺伝子の水平移動を担う存在だと。ウイルスは全部で3万種あり、哺乳類と鳥類に感染するウイルスは約650種らしい。そのうち一般的な風邪というのは90%がウイルスであり、200種類あるとも言われ、その代表格は、

- ・ ライノ （大人のカゼの2分の1から3分の1を占める。鼻風邪ウイルス。110種類ものタイプがある）
- ・ インフルエンザ （高熱を伴う風邪症状、気管支炎や肺炎を併発することもある。風邪の原因の10-15%を占める）
- ・ コロナ （風邪の原因の10-15%を占める）
- ・ アデノ （俗にいう「プール熱」）
- ・ RS （乳児の細気管支炎・肺炎を引き起こす）

残りの10%はマイコプラズマという細菌とウイルスの中間体、クラミジアという細菌が引き起こしている。

このうち、コロナウイルスは1960年代から認知されていて、ヒトに感染してよくある「風邪」の症状を引き起こす4種類と、2003年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、2012年のMERS（中東呼吸器症候群）、そして今回の新型「正式名称：SARS-CoV-2」の3つを加えて7種類がある。

ところで、アジアやアフリカの野生動物には、MERSやSARSに似たコロナウイルス92種を含む1,000種類の未知のウイルスが存在するらしい。SARSコロナも、当初は「新型コロナウイルス」と呼ばれていて、そのうち第3、第4の新型が出てくることは想像に難しくない。

【脅威？】

日本の人口1億2,680万に対し、2019年の死者数は137.6万人（率にして1.08%）だったそう。そのうち悪性新生物（ガン）が27.4%、心疾患15.3%、老衰8%、脳血管疾患7.9%、肺炎6.9%の順。

今回のコロナウイルスでは、7,250人が感染し、亡くなった人は102人（4/13日現在。致死率1.4%）それに対し、インフルエンザが原因で亡くなった方は、2018年は3,300人。2019年は1月だけで1,685人だったそう。インフルエ

ンザのほうが一ケタ死者が多い状況である。

【新型コロナと解熱剤は相性最悪？】

新型コロナの場合には、解熱剤は絶対に飲んではダメと、杏林予防医学研究所の山田豊文所長が言っている。「熱は必要だから出る」 身体の免疫が治すために発動してくれているものを、化学物質で無理やりに下げれば、免疫がうまくかかず、免疫が暴走してしまう（サイトカインストームと呼ばれる）。この場合は、若い人でも重症化してしまうそうだ。

【新型コロナとどう付き合うか】

新型コロナに有効な化学物質として「アビガン」がいわれている。ウイルスの増殖を選択的に阻害することで、重症化を防ぐとされているが、実際は動物実験において、本剤は初期胚の致死及び催奇形性が認められている劇薬である。

また、タミフルやリレンザなどの化学物質は、ウイルスの転写を抑制したり、細胞質から外に出るのを抑制しているだけ、つまり、体内に入ったウイルスだけを殺す薬は存在しない。農業において病害虫だけをピンポイントに殺せる都合の良い殺菌剤や殺虫剤はないのと同じである。

もしウイルスを殺すような薬があるとすれば、それは人間の身体も傷つける毒だろう。ウイルスを最終的に殺滅しているのはあくまでも人間の免疫力。新型コロナウィルスに感染者 7,618 人のうち、799 人が治癒している。この人たちは薬ではなく、自分の免疫力で治った。つまり、コロナ対策とは免疫をあげること。防げるのも、治せるのも自己の身体の免疫だけ。

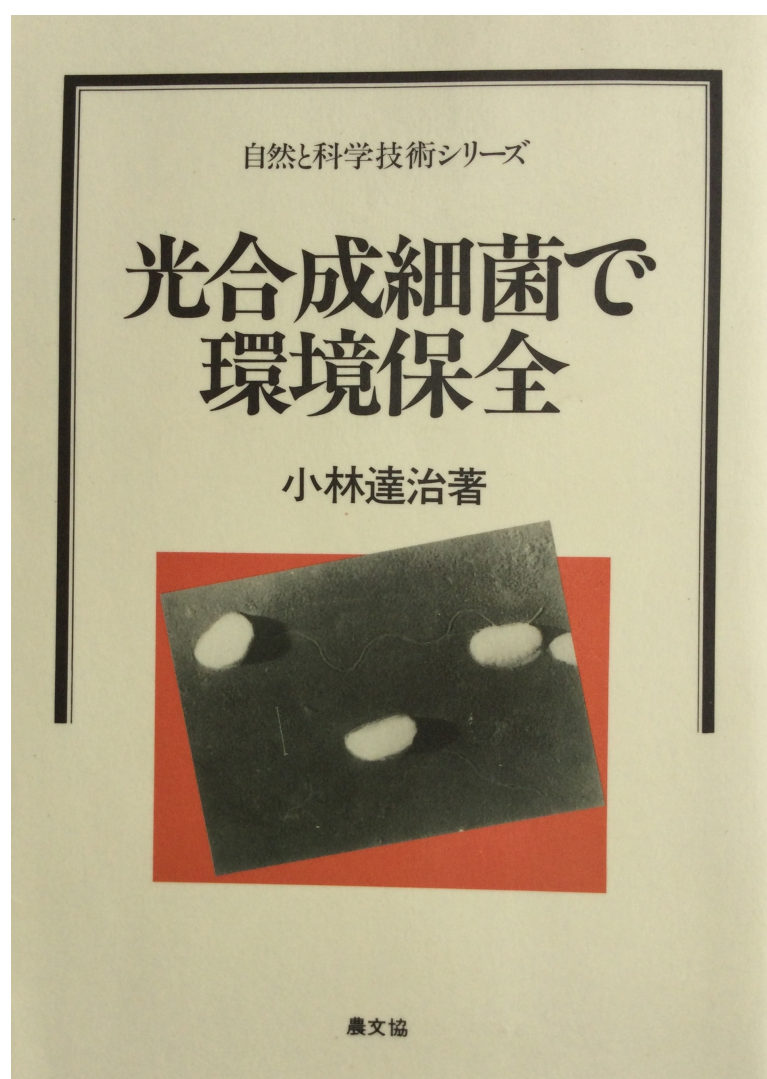
自然から与えられた最も安全で、最高の防御機構である免疫機能、その要は腸内環境。日光を浴びて、適度な運動でしっかりお腹を空かせ、植物のフィトケミカルたっぷりの美味しい食事、発酵食品、そして質のよい睡眠。それとメンタルな部分も大事、心配などせず、明るく、楽しく、笑顔で過ごす、除菌のしすぎは控え、常在菌を大切に等。

【まとめ】

コロナ騒動のお陰で、経済活動がストップし、北インドから何十年かぶりにヒマラヤが拝めるようになったとか。封鎖された武漢の町も、スモッグで曇った空が青空に変わったらしい。温暖化の原因とされる CO2 の排出量も史上初めて減少するという。新型コロナを地球環境改善の救世主という人もいる。いいかげん地球環境が限界だと考えた権力者たちが、編み出した策という想像も出来る。空想はさておき、ウイルスを撲滅することはできず、ウイルスと人間の戦いは永遠に続く。仮に今回の騒ぎが夏には収まったとしても、いつかまた新しいウイルスがやってくる。

そんな「いたちごっこ」には参加せず、自然の一部であるウイルスと共存共生することを考えよう。そもそも、自覚症状すらないようなウイルスに怯え、室内に引きこもる日々がもったいない。貴重な人生の時間を、病氣のことを考えて煩うのは時間の無駄というほかない。

どうせなら、ピンチをチャンスと捉えよう。持て余す時間で農に勤しみ、免疫を高め、必要に応じて家庭の医学・民間療法を実践し、農・医・燃料など多くのものを自分たちの手に取り戻せる。大地に根ざして一步一步。



光合成細菌の第一人者である小林達治先生の著書から光合成細菌のもつ力を学ばせて頂きました。機会がありましたらご一読下さい。

新しい「猿島野の大地を考える会」

清水 美智子

令和は「猿島野の大地を考える会」がNPOを降ろして、楽しい暮らしと活動に、生まれ変わる年でした。1/19の新年会では、若い家族の参加が増えて、小さい子供達が一生懸命に、お餅を搗きました。

その直後にコロナが世界中に流行して、総会、そば打ちが中止になってしまいました。誰も経験した事が無い不安で、地に足が着いていない毎日です。会の便りに何を書けばよいのか、集中力が無くて一向にまとまりませんでした。

ブラジルでもアマゾン流域の原住民から、感染が広がっています。ボルソナロ大統領は「人はいつか死ぬ。毎日、交通事故で人が死ぬ事と変わらない。」と、経済活動を重視。市民の自主的な自宅待機が始まっています。

ブラジルのニュースが目に残るようになったのは、昨秋10/14-26日にブラジルを訪問してからです。日本に台風が次々に上陸して、大災害に見舞われていた時です。因らずも不安な思いで旅立ちました。

訪問の経緯は、農大の同級生が4人サンパウロ州に移住しています。数年前から「ブラジルで同窓会をやろう」と呼び掛けが有りましたが、本気で受け止めていませんでした。移住者の一人から「娘の結婚式に来てくれ。歩けなくなったら来られないぞ。」と、身に迫る招待。事実令和元年6月、私に多大な影響を与えてくれた人が、続けて亡くなりました。22日に小学校から高校まで一緒だった友人が。24日に帰農私塾の戸松正さんが。受け止められない出来事でした。すでに3年前には、農大と同窓会が大好きだった女性も亡くなりました。「彼女こそ行きたかった人。明日は分からない。」と参加を決めました。

参加者は6人。地球の裏側は本当に遠かったです。どうしてこんなに遠い所に、移住したのだらうと思います。私が飛行機に乗るのは5年ぶりです。「百聞は一見に如かず」を幾つも体験出来ました。

それなのに帰国したら、日常生活に忙殺されていました。12/4中村哲さんの殺害で、太陽を失った思いでした。ブラジルの写真もそのまま、貴重な記憶も感動も、どんどん薄れていきます。コロナに追い打ちを掛けられて、本当に忘れてしまうところでした。

ブラジルのニュースを聞いて、「今、整理しなかったら絶対に忘れる。」と強く思いました。自分の為を書く。書けば思い出せる。書けば残ると。私事で申し訳有りませんが、お時間が有りましたら、読み捨ててください。

ナイアガラ滝とイグアスの滝

台風19号の影響で国内の交通機関も乱れていた。羽田発のエアカナダが9時間遅れ。トロントで乗り継いでサンパウロに行く予定が、トロントでも一日遅れになった。それ

で予定には無かったナイアガラを見る事になった。

ナイアガラは紅葉が美しかった。数え切れないほどの観光客なのに、混雑感が無い。言葉にならない壮大な景色。どこまで歩いても滝が続く。ゴムボートに乗れば吸い込まれそうになる。対岸はアメリカ。圧倒的な水量、水しぶき、これこそ大自然だ。しかし、何回か見た人は「水量が少ない」と言っていて驚きだった。

サンパウロでは、早朝の飛行機でイグアスの滝へ。ここでも、違う形態の滝の壮大な景色に圧倒された。野生動物の捕獲は禁止されているので、イグアナも人間に寄って来る。

ブラジル、アルゼンチン、パラグアイが共有する世界第二位の水力発電所が有る。

パラグアイは余った電力を、ブラジルなどに売却。世界一の電力輸出国だと言う。それは一人当たりの電力消費量が、日本人の 1/3 であることも鍵だと思う。ここでも「水量が少ない」と聞こえてきた。南米大陸は水力発電が多い。太陽光が農村で拡大中。

思いかけず世界三大滝の二つを、一度に制覇できた。残る一つは、アフリカのビクトリア。ここはすでに枯渇しているという情報も有る。

化石賞

COP25 でブラジルも日本と共に、不名誉な賞を受けた。日本は石炭火力発電所の使用と輸出に、改善も対策も示していない。

ブラジルはアマゾンの森林火災。ボルソナロ大統領は、大豆の栽培地を広げる為に、黙認していると言う。本来ならば、農地造成でも原生林の 30%を、残さなくては行けない。

食物

食べ物は全部美味しかった。自給率 120%以上の国の力強さが、胃袋で分かった。市場もスーパーマーケットも、食糧が山積みになっている。果物、野菜、豆類、ナッツ類、ドライフルーツ、どれも種類の多さ、新鮮さ、安さに興奮してしまう。

乳製品も豊富で、マーガリンは無かった。トランス脂肪酸を売っているのは、日本だけらしい。生クリームも無くて、ケーキはバタークリームだが美味しい。私達が子供の頃食べたバタークリームは、きっとマーガリンクリームだったのだと思う。

「尻尾料理」が美味しかった。牛の尻尾と豆の煮込み料理で、ビーフシチューに似ている。下処理に時間をかけた料理が多い。豆類を沢山食べている。ブラジルの食材を見ると、鉄分とタンパク質が多い。食欲旺盛で一人前が、日本人には二人分有る。ブラジル人の躍動的な生活と、陽気な性格は、食べ物で作られていると感じる。

今、日本はコロナで輸入も支障が出ている。食糧自給率 38%の日本は飢餓になる。「在庫は十分に有る」は、何カ月なのか分からない。鉄分とタンパク質不足の日本人は、笑いが少なく、日本全体が鬱になっている。

放牧

1頭の牛に1haの牧草地が必要。この知識は、学生時代から持っていたが、現場を見て「こういう事か！」と本当に分かった。広大な土地で牛が草を食んでいる。1頭の牛が1ha食べつくしたら、最初の場所の草が育っている。小川や池で水を飲み、大木の影で休む。人間は何もしない。肉牛だったら、成長を待って出荷するだけ。乳牛は搾乳する施設と人手がいるが、餌代がかからない。

日本の酪農は馬鹿げた努力と思うほど、衝撃だった。日本の牛は牛舎に閉じ込められて、穀物主体の濃厚飼料を食べる。脂肪分が高くなるから、乳腺炎の危険もある。牛舎の糞の掃除、消毒を徹底する。機械化されて工場のような牛舎。餌は輸入。

北海道などは放牧もあるが、冬は草が育たないので、夏の間中牧草を刈ってサイロに入れる。莫大な経費が掛かっている。

60歳以上は無料

公共交通機関と医療費が、60歳以上は無料。外国人でもパスポートを表示すれば無料。ブラジル人は身分証明書を表示する。ただし、医療は有料の病院も有り、富裕層はそちらを選ぶ。

日本では、無料や手当には、年収が絡んできて、複雑な計算手続きをする。上手に数字を合わせる人もいるが、自己申告が基本だから、知らない人は受けていない。意地悪な国だ。

弓場農場

今回、私が一番の目的地にしていたのは YUBA。ブラジルも移住も興味が無かったが、学生時代に知った弓場農場には惹かれた。「百姓する事、芸術する事、祈る事」のスローガンが胸に刺さっていた。芸術の柱がバレエだと言う。是非見たいと思っていた。

1978年に東京農大でも公演されたが、私は卒業していた。1991年隣りの水海道市（現常総市）で公演が有って、見る事が出来た。さらに28年たって、弓場農場を訪問出来た感動は、言葉にならない。しかも、バレエ指導者の小原明子さんに会えるとは、夢にも思わなかった。85歳の今も、美しい姿勢だった。

農場の施設は、テレビで見たままだった。朝6時角笛で一日が始まるのも、変わっていない。そのまま時間が過ぎているから、高齢化が加速している。子供達は都会に出ていく。働き手が少ない。バレエ団も50代で10名以下。

創設者弓場勇氏は、養鶏では南米一を誇り、神様と言われた。またブラジル野球会の先駆者として知られている。協同組合の父、賀川豊彦氏や文化人が、数多く訪れている。弓場勇氏について書かれた書籍も多い。1976年農場50周年だったが、12/10に交通事故で急死した。70歳だった。後継者育成が完成されていなかったと思う。自由、平等、好きなことをする共同生活は、一人一人の高い理念が無ければ、難しいと痛感した。

「大地っ子」に参加して

石川 ゆかり

初めて自生農場を訪れたのは2019年6月でした。かまどが設置されている広場を見渡した時、「うわ〜、なんてきれいな場所なんだ、天国みたいだ」と感じたことを今でも覚えています。別段、お花が咲き乱れているわけでもないのです。でも、そう感じたのです。

その日は、坂東市で活動をしている「大地っ子」に初めて参加した日でした。千葉県野田市から来ました、と言うと小野さんご夫妻をはじめ、四季の会の方々が大地っ子の親子を快く迎えてくださった。お茶を飲み、鶏に葉っぱをあげて、子どもと一緒に七夕の笹飾りを作り、美味しいゆで卵を食べた。何をしたかといえば、ただそれだけなんです、私はその時間と場所がとても大好きになってしまいました。

大好きなことは、やっぱり人に教えたくりますよね。私の子どもが通っている幼稚園のお母さんたちに声をかけました。みなさん、子どもを連れて遊びに来ました。そして、賑やかで楽しい時間を過ごしました。

子供達はこの場所でお餅をついたり、お味噌汁のお野菜を切ったり、枯葉の山に飛び込んだりと思い思いに遊んで過ごします。この場所で過ごしたことが記憶の引き出しの一つに収まってくれればいいな。そして、子供達が大きくなって、子どもができて、この場所で遊んだ楽しさを思い出してくれればいいな、と願っています。ただ、それだけです。そして親がすることといえば、このように遊べる場所を残してあげることです。そうすれば、次の世代も遊んで過ごせますからね。「なんだかわからないけど、きれいだな」と感じられる場所と人を残していきたい。小野さんご夫妻と大地っ子をつないでくれたこのご縁を、感謝しています。



この日はお父さんの参加もあり、子供達は広場で遊びに夢中です。

人の先立ちになって

会員 木村 陽司

2019年春、パリのノートルダム寺院が焼けた。そこに祀られている多くの聖人たちのひとり、ジャンヌダルクは百年前の1920年5月30日に聖人に列せられたという。今はちょうど100年目に当たる。コロナウイルス騒ぎの中、封鎖されているパリでは、彼女の栄誉を祝う式典が行われるだろうか。

彼女は日本でいえば室町時代の人。ご案内のとおり、大天使ミカエル（サン・ミッシェル）等から神の啓示を受けたとされている。「フランスを救え。王太子シャルルを戴冠させよ。」ということでフランスを救おうと立ち上がった。

百年戦争の中、イングランド軍に国土の大半を占領されたときに、それを駆逐してシャルル7世の戴冠を果たした。戦略眼を持ち、矢創を負いながらも軍人たちに混ざり、人々の先頭に立ち、要所々々に攻め入って行った。その後にイングランド軍の捕虜になった。

19歳の若い女性が実際の戦場でどう行動したか？先頭に立って指揮を鼓舞したのだろうか。今もフランスで一番の英雄と言えれば彼女だという。捕虜になった際にも、身代金を積んで人質を救い出す道はまだ残されていた。現代のフランスでも火刑に処せられた彼女を救わなかったシャルル7世が悪いという人が多いらしい。神の言葉に、死を恐れず行動した彼女は、フランスだけでなく、世界のカトリックの聖人にまでなった。

同じ頃、中央ヨーロッパでフス戦争（1419-1439）があり、西洋の歴史上で初めて、人に銃が向けられている。記録の上ではジャンヌダルクと同時期であるが、彼女には向けられなかった。

ジャンヌダルクとは比べるべくもないだろう。時代や状況は全く異なるけれど、国土の回復、平和を願う気持ちの大きさという点で、中村 哲さんは常人を超えている。

中村 哲医師は、戦場の国土にありながら、不可能と思える困難な課題に挑戦した。人々の先に立って国土の回復、平和に向かってまい進した。

中村 哲氏はカトリックではあるが、神の声ではなく自身の目でペシャワールの向こう、アフガニスタンの窮状を見た。

40年間にわたり荒廃してしまっていたアフガニスタンの国土を回復するために立ち上がった中村 哲医師は人々の先に立ち、人々の応援、重機やトラックの助けをも借りることができたが、自動小銃の前に倒れた。

この数年、アメリカは軍事費の増加に悩み、費用面の重さに苦勞している。そしてアフガニスタン政府に、より簡易な多くの装備を与えているという。ゲリラ側の民兵組織にも対応する十分なものを与えると。

反政府勢力の側から見れば、強大な力を持つアメリカに相手は出来ない。また財政面で難があるが、ある程度の物量を与えられているアフガニスタン政府と対等に当たるには困難が伴う。だからゲリラ闘争やテロ行為に走るのか。そのような状況でアメリカ軍とアフガニスタン政府、その係累になる人々は、すべて反政府側の人々からは一続きの存在、忌むべきものに映ってしまうのだろうか。あたかも富士山とその裾野のように一連のものとして見えてしまったのだろうか。

アフガニスタンのガニ大統領は彼の棺を担いで見送った。
アフガニスタンの人々と国土はまだ支援を必要としている。



私達の元気の源であった中村哲先生の残した著書を読んでみて下さい。

感謝と願い

小野 羊子

「猿島野の大地を考える会」は、平成四年に宮沢賢治的世界観を抛り所に、「自由な魂、平等、行動、非政治、非営利」を基本理念に誕生しました。そして、この度、約二十年近くやってきた NPO 法人を無事に解散でき、その間に会として独自の事業に辿り着けたことに対して、会員の皆様には深く感謝いたします。様々な人たちの関与、協力、助言、支援なくしては、絶対ここまでたどり着けませんでした。本当にありがとうございました。

大量生産、大量消費、大量廃棄で物余りの現代。そして、グローバルで世界中の情報が錯綜し、変転極まりない中、あちこちで地域紛争が起こり、それが世界戦争の火種になりかねない複雑な様相を呈している現代。その上、地球温暖化という、人類史上これまでにない大問題をかかえてしまった現代。

この三つの現代の根源的な問題に対して、世界中で誰でもどこでもいつでもでき、自分たちもそれを実践することで真の元気、安心、希望、連帯感を手に入れることができた実感できる、会として独自の三つの事業に辿り着きました。一つは、「もったいないピースエコショップ事業」です。この事業の特質は、勿体無い物を活用することで、自分の周辺も整理され、世界平和やエコという遠大なテーマに自分の足元から関与できる点です。二つ目の事業は、「もったいないピースエコショップを各地に広げる事業」で、これまでに五号店まで生まれました。三つ目の事業は、光合成細菌を始めとする有用微生物による環境保全事業です。これまでに私達の会は、住民参加型の環境基本計画を茨城県で最初に作った意識の高い旧猿島町と、「EM 生ごみぼかしの無料配布制度」を約十年、EM による「米のとぎ汁流さない運動モニター制度」と西仁連川の浄化活動を十数年、一緒にやってきました。もう一つ、会で普及に努めているのは、環境にも体にもいい EM 液体石鹼です。そして、最後に辿り着いたのが、地球温暖化防止に貢献する光合成細菌による生ごみの簡便な自家処理法で、四季の会や他の会員さんも取り組んでいます。

一方、今年度は、会にとって明暗を二分するような年でした。先ず明の分野では、五月の新聞に、地球温暖化問題に対し、たったひとりのストライキを通して、最初は 150 万人、二回目は 450 万人、三回目は 780 万人の世界中の若者のデモに発展させ、世界中の人々の関心を喚起させたスウェーデンの十六歳の少女、グレタさんの記事が載っていました。彼女の次の言葉が、その後の私をとらえて離しませんでした。「注視すべきは温室効果ガスの削減だが、実際には減っていない」「地球規

模の問題に対して、私たちは全員何かをする責任がある」「最も大切なのは、気候変動について学び、それが何を意味するかを理解し、自分ができるのは何かを考えること」。彼女のこの言葉は、何年も前からこのテーマを追って、自分達なりの答えにたどり着き、努力していた私たちに一筋の光明を与えてくれました。人類有る限り地球上で永遠に出る生ごみを、光合成細菌と組み合わせ処理することが、地球温暖化防止につながれば、万人が責任を全うすることにもつながります。そして、この原理が正しければ、文明の利器を活用して、大規模に処理し堆肥化し、それを大地に還元すれば、化学肥料や農薬で微生物が激減している大地を豊かにし有機農業の道にもつながります。世界中で生ごみを活用すれば、焼却費用は要らず、大気も汚さないばかりか、二酸化炭素が減少することになります。その上、光合成細菌は、二酸化炭素だけでなく、硫化水素やメタン、アンモニアなど人間が困っているものをえさにし、人間にとって助かる核酸やビタミン、カロチン、アミノ酸などを分泌し、放射能も減少させます。そこで、大気汚染にも大量の光合成細菌を散布することは、とても有効だと思います。昔、畑に光合成細菌を散布した時、そこから美しい虹ができたのを懐かしく思い出します。

そして、もう一つの暗の分野では、私達の会がこれまで支援の主軸を置いてきたペシャワール会の中村哲さんの突然の死でした。彼がアフガン全土に難民のため緑の大地計画を広げようとしていた矢先の出来事でした。長い間定期的に送られてくるペシャワール会の便りに「アフガンは洪水と旱魃の繰り返しだったが最近では旱魃がひどくなり、これも地球温暖化の所為だろう」と書かれていたのが思いだされ、水利権の問題が頭をよぎり、世界中を覆っている地球温暖化問題の深刻さを思い知らされた衝撃の瞬間でした。そこで今、待ったなしでこの気候変動への解決が求められています。私が、ゴルフ場での店番をしながらの読書を通して作成した拙いですが「光合成細菌物語」を読んで頂ければわかりますが、壮大な地球史の中で、光合成細菌やシアノバクテリアという微生物の存在という大前提がなければ、動物、植物の存在はあり得ませんでした。

パラダイムシフト、きいたことがあるでしょうか。時代を変える価値転換を意味します。光合成細菌やシアノバクテリアの活用は、地球温暖化問題の解決法として、パラダイムシフトの価値は十分あると思います。そんな日がいつか来る事を願いながら、光合成細菌と生ごみの二つの活用法、一つは日常の生ごみ処理、もう一つはもみがらを活用した堆肥化実験に取り組む日々です。

平成31年度の活動及び会計報告（平成30年4月～平成31年3月）

収入

前年度の繰越金	0
今年度の会費	344,000
寄付金（大地っ子の参加費含む）	36,300
年二回交流行事参加費	24,200
事業収入	
もったいないピースエコショップ事業	941,562
循環型社会構築事業	41,530
環境意識啓発事業	<u>57,200</u>
計	1,444,792

支出

ペシャワール会寄付	380,000
支払い手数料	1,174
通信費	32,236
交際費	6,800
消耗品費	9,923
ホームページ管理費	14,400
材料代	23,000
年二回交流行事経費	21,000
雑費	<u>5,300</u>
計	493,833

次年度繰越金

1,444,792 - 493,833 = 950,959 円

国や宗教の違いに全くこだわらず、世界平和を体現してきた中村哲さんは、私達の会にとって象徴的な存在でした。その彼を失ったことは、大きな痛手でした。これまで私達の会の令和元年度迄のペシャワール会への支援総額は、解散時の残余財産も入れると 2524 万 7000 円になります。アフガンの作業員の日当が、日本の終戦時のニコヨンと呼ばれていた人達と同じ 240 円と知り、難民の人達の自立の為の緑の大地造りにとてもお役にたった事を皆さんに感謝します。これからも中村さんの遺志を継いで続けるとのこと。私達も高齢化で、今までのように沢山は支援できませんが続けていくつもりです。これまで同様、卵油や光合成細菌、EM 製品、EM 石鹼、支援野菜、手芸品などを通して、会の三つの事業に温かいご支援、ご協力を心から願致します。有難うございます。

今、世界中を苦しめているコロナ問題。いつ終わるとも知れない中で、生活苦に直面している人達の心中を察すると心が痛みます。賢治の「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」という言葉は、これまで人類が恩恵を受けた地球に対して、畏敬と感謝の念を持った地球市民として「先ず水と食」という生物としての命を優先させる共生社会を願っているように感じます。



コロナ問題の最中でしたが幸いにも展示は許され準備をしているところです。
(於：坂東市猿島公民館にて)



光合成細菌入りのもみがらと生ごみをサンドイッチに積み重ねたものを反転している所です



生ごみバケツから土に移した生ごみです。すでに光合成細菌を散布（スプレー）したものです。